

## 実践活動報告書（冬季研修）

倶知安町地域おこし協力隊 佐藤礼乃

### 主な取り組み

○にほんごサロン「にこちゃん」（週2回 全14回） 10月24日～12月15日

- ・学習タイム（1時間）：グループに分かれ、テーマに沿って会話。
- ・交流タイム（30分）：自由に交流する時間。

○倶知安風土館・美術館見学

○多文化交流ポットラックパーティ

一人一品、料理を持ち寄る

形容詞ビンゴを開催。景品も持ち寄り

### 前回までの課題と、実践の内容

課題①	サポーター1人1人の「地域の日本語教室」に対する意識の不統一
考えられる要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こちらからコンセプトを提示できていなかった。</li> <li>・勉強会に参加したサポーターと、していないサポーターと一緒に教室に参加</li> <li>・昼の時間に勉強会をしていたので、働いている人はそもそも参加できない</li> </ul>
解決策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強会に参加必須とし、昼と夜の時間帯に勉強会を実施。</li> <li>・地域の日本語教室のコンセプトを設定</li> </ul>
実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が勉強会に参加するため、勉強会の時にサロンでどんなことをするのかサポーターがわかった上で参加できた。（期待していたのと違う、と勉強会で辞退する人もいたが、意識の統一という面では良かったと捉えた）</li> </ul>

課題②	サポーターの主体性が弱い
考えられる要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマはターム前の勉強会の時に先生が決め、それに従う形だった。</li> <li>・備品は運営側が用意（町の地図やスーパーのチラシなど）</li> </ul>
解決策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強会のグループワークで、みんなで話したいテーマを決める！それに基づいて、必要なものを持ってきてもらう。</li> <li>・教材 BOX の設置：日本語サロンで使えるようなもの（かるた、けんだま、教材など）を寄付してもらい、サロンの時間はみんなで共有</li> </ul>
実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流タイムにサポーター寄付のゲームをすることで、「みんなでサロンを行っている」という意識が生まれた。</li> </ul>

課題③	学習者の参加人数が少ない。
考えられる	SNS や町の広報で日本語教室の存在を周知（外国人の目にあまり届かない）

る要因	
解決策	SNS, 町の広報の他に、町で生活する人がよく利用するスーパー、ドラッグストア、100均にポスターを掲示
実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ はがきサイズのフライヤーを作成。町内各所に配布</li> <li>・ サポーターにもフライヤーを配布してもらうようお願い</li> </ul> <p>★参加人数は少なかったが、継続して参加する学習者が出てきた。あいまって、サロン内での関係性も深くなった。参加人数よりも、継続率のほうが大切だということに気づいた。</p>

### ●実践を通じて考えたこと

- ・冬のシーズンインとともに外国人数が急激に増え、0初級の学習者も増えた。
- ・0初級の学習者の対応は、有資格者に頼っている
  - 対等な関係を築く場として、特定のサポーターに頼るのは避けたい
  - エースのようなサポーターがいることは、持続可能な教室の実現が難しくなる（誰もが0初級に対応できるシステムが必要）
- ・既存の教材は、俱知安の生活にぴったりと合った内容を学習できない
  - ⇒俱知安での生活の日本語を学べるオリジナル教材の作成

### ●難しいと感じたこと

- ・学習者から、サポーターとの会話でいやな思いをしたことを打ち明けられる
  - テーマ外の話に脱線しても良いとしているが、制約を設けるべきか？
  - 学習者からの声をコーディネーターが聞くシステムがない（サポーターは毎回記録用紙を記入してもらっているが、学習者はない）
  - 会話の主導権はサポーターに偏ってしまうことに気づく

### ●地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割

今年度は、町とサポーター、学習者のつながりを深める取り組みができたと思う。にほんごサロンという場所の構築、そして「学習タイム」と「交流タイム」により学習に対するニーズと交流に対するニーズ両方に答えられたのでは。

学習者からは、「自然な日本語を練習で来て良い」という声や、サポーターからは「言葉が完璧でなくてもコミュニケーションが取れることを学んだ」という声が上がっており、新たな多文化交流の拠点となるような場所を作ることができた。

今年度は町や参加者のつながりを深めることができたが、これから次年度に向け、「多文化共生推進協議会」の開催を検討したい。外国人の受け入れ企業や、商店街の事業所など、関係機関との連携を深め、外側とのつながりを深めていけるようコーディネーターとして努めたい。

●地域日本語教育コーディネーターとして大切にしたい視点

・対等

学習者とサポーターだけでなく、学習者同士・サポーター同士の対等性も大切にする。にほんごサロンが地域の「サードプレイス」となり、参加者が対等な関係で交流できる居場所を目指す。

・日本語を使ってできることを増やす

日本語のレベルアップも大切だが、いま知っている日本語でできることを増やすということに焦点を当てる。学習者自身のできることも増やすが、サポーターが「やさしい日本語」や傾聴を使ってできることも増やす。

・持続可能なにほんご教室

誰もが運営しやすいシステムづくりをする。1人のコーディネーター、1人のサポーターに依存する形ではなく、誰でも簡単に活動をしていけるようなシステムを作ることを大切にする。

●今後に向け知りたいこと

・調整会議 を行うことの意義、行う頻度、場所など

周辺地域の日本語教室と連携を始めたい。他地域はどのように調整をしているのか。また、調整を行ってよかったことなどを知りたい